

における四段階の指導過程(図1)を踏まえることである。つまり、「課題把握」→「課題追究」→「解決・定着」→「適用・発展」の各過程に沿って、両学年の過程をずらしていく。この場合においても、機械的にずらすのではなく、学習内容を十分に検討した上でずらすことが大切である。

下の学年	教師の位置	上の学年
課題把握 (直接指導)		適用・発展 (間接指導)
課題追究 (間接指導)		課題把握 (直接指導)
解決・定着 (直接指導)		課題追究 (間接指導)
適用・発展 (間接指導)		解決・定着 (直接指導)

図1 四段階指導過程 (矢印は、教師のわたりを示す。)

(イ) 時間配分を考えた指導過程

四段階指導過程の原則を踏まえながらも、学習内容が難しく、指導内容の確実な定着のために多くの時間が必要な場合や、題材ごとの子どもの実態からより多くの時間をかけて指導することが必要とされる場合には、指導内容の重点化を図らなければならない。そのためには、機械的に直接指導と間接指導を割り振るのではなく、両学年の指導時間の割合を考慮することが大切である。

3 間接指導における学習指導の工夫

前項の(イ)で述べた時間配分に配慮し、指導内容の重点化を図ることは、子どもの

学習状況に応じた指導を可能にするが、このことは、どちらか一方の学年に対する直接指導の時間が減少し、間接指導の時間が増えることにつながる。

しかしながら、間接指導を複式学級であるが故のマイナス面にとらえるのではなく、子どもたちに自主的な学習態度や自力解決の力を育てることのできる「複式学級のよさ」ととらえたい。マイナス面と思われることをよさに変えるためには、次に示すような間接指導時における学習指導の工夫が大切である。

(1) 学習の見通しの明確化

- 単元(題材)の全時間の学習内容を提示しておく。
- 1時間の学習内容の流れと、大まかな時間を掲示する。
- 間接指導に入る前の直接指導において子どもの学習状況を確実に見取り、適切な指導を加え、間接指導時の自力解決のための見通しをもたせる。

(2) ヒントカードやワークシート、教材・教具の工夫

- ヒントカードやワークシートは、子どもの学習状況や課題に応じて選択することができるよう、複数の種類を準備する。
- 教材・教具は子どもの意欲を喚起し、可能な限り自力解決を図る手助けとなるものを工夫する。

(3) コンピュータ等の効果的な活用

計算問題等の習熟を図る場合だけでなく、子ども一人一人のつまづきを予想し、そのつまづきを自力解決するための手助けとなるような手だてをコンピュータにあらかじめ準備しておく。

4 展開例

わたりを最小限に押さえながら、学習内容の確実な定着を図るために時間配分を配慮したり、同時に両学年を指導する時間を取り入れたりして、間接指導時の自立解決の手だてを十分に配慮した例を紹介する。

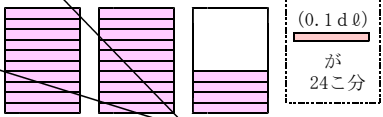
(1) 題材名 3年「わり算」(3/10) 4年「小数」(3/9)

(2) 展開に当たっての留意点

ア 3年生は、前時までの学習内容(等分除の場面を式で表したり、答えを求めたりする内容)を深める活動であるが、4年生は教師が十分かかわることで習得できる学習内容(小数を多面的にとらえる内容)であるので、4年生に重点を置いた指導を行う。

イ 間接指導時に、子どもたちが主体的な学習を進めることができるように、わたる前の直接指導時に学習内容や解決の見通しを把握させ、その内容を小黒板にまとめて掲示したり、個々の学習状況を確認に見取る観点を明確にしたりするなど、それに応じた個別指導を行う。

(3) 展開

主な学習活動(第3学年)	教師の位置	主な学習活動(第4学年)	同時導入
1 学習課題を知る。 絵を見て、わり算の式になる問題を作ろう。 (1) 問題を作る。 (2) 立式し、答えを求める。	教師	1 学習課題を知る。 (1) 前時までの学習内容を想起する。 (2) (1)の答え合わせをする。 (3) 学習課題を把握する。 2.4dℓをいろいろな方法で表そう	4年生の直接指導の時間を確保のため指導過程を合わせる。
2 めあてを設定する。 いろいろなわり算の問題を作ろう		2 めあてを設定する。 小数を0.1dℓの何こ分かで表してみよう	自力解決の手だて
3 解決の見通しをもつ。 ・ 数値や事象を変えて問題を作る。 ・ 問題文を絵に表す。		3 解決の見通しをもつ。 (1) 答えの予想をする。 2.4dℓは0.1dℓの□こ分 (2) 解決方法を考える。 0.1dℓのタイルの数を数える。	3年生の事象や数値を複数を意が学習するよう
4 自力解決をする。 例 9個のケーキを3さらに同じようにならべると1さら分は何こになるでしょう		4 自力解決をする。 	4年生の解決に要する時間や結果の手順を黒板にまとめる。
5 解決結果を発表し、話し合う。 (1) 解決結果を発表し合う。 ・ 作った問題文を発表する。 ・ 質問や意見を発表する。 ・ 問題文を表す式を発表する。 (2) 解決結果について感想を発表する。		5 解決結果を発表し、話し合う。 (1) 解決結果を発表し合う。 ① 1dℓで0.1dℓが10こ分ある。 ② 2dℓで0.1dℓが20こ分あって、あと0.1が4こある。 ③ 2.4dℓは0.1dℓの24こ分である。 (2) 他の数値で確かめる。	同時に指導を行う。
6 学習のまとめをする。 全部の数をいくつか同じ数ずつ分ける考え方をとて、物や数を変えることでわり算の問題が作れる。		6 学習のまとめをする。 0.1を数えると、小数を0.1の何こ分かで表すことができる。	自力解決の場面では、同時に3年生にも個別指導ができるようにする。
7 他の式で問題文を作る。 いろいろな問題を作り、友達と交換し答えを求める。 例 20本のジュースを5人に同じ数ずつ分けると、1人分は何本でしょうか。		7 小数をで表す問題を解く。 【問題例】 ・ 2dℓと0.7dℓで□dℓ ・ 1.6dℓは、0.1dℓが□こ分	学習内容の定着
8 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を知る。		8 本時の学習を振り返り、次時の学習内容を知る。	4年生の学習内容の十分な定着を図るために、見通しをもつ場面から解決結果の話し合いまで続けてかわる。

(※ 本実践例は、教育センター提携校 笠利町立宇宿小学校 橋口 俊一教諭の実践を基に作成)

5 まとめ

算数科は、習熟の程度の差が大きくなりがちな教科である。その分、子ども一人一人に確実に基礎・基本を身に付けさせるために、様々な工夫

と改善を絶えず図っていくことが重要である。算数科に限らず、複式学級であることのよさを生かすためにも、子どもの学習状況に応じた指導の手だてを工夫してほしい。

(教職研修課)